

スペイン風邪とコロナ・パンデミック

長谷川 修

スペイン風邪は、一九一八年から二〇年に流行し、死者は世界で四〇〇〇万人（第一次世界大戦の四倍）、日本で四五万人（関東大震災の五倍弱）と二〇世紀最大の人的被害を出した。ところが欧州では世界大戦の最中であり、統計は不正確で纏まった文献はなく、日本でも直後に起きた関東大震災の復旧に追われ、文献は内務省衛生局の調査報告書『流行性感冒』が唯一であり、歴史の記録・記憶から無視されている。

歴史人口学で第一人者の速水融はやみ とうさんは、大勢の死者から何の教訓も得ていないことを無念に思い独自に研究を行って、大著『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』を著した。出版は二〇〇六年で、新型インフルエンザのトリ、ブタ、ヒトを経てヒト間流行が危惧されていた頃である。

研究の基本資料として、官庁の公表数値と当時の各地の地方新聞を使う。「超過死亡」（特定の病気の流行があった場合、その病因の平常年の死亡数と流行年の死亡数の差）の手法を用い感染の死者数を推測し、国内四五万人（従来は三八万人）、外地（朝鮮、樺太、台湾）二九万人とした。また、興味深かったのは、

- ① 年齢別死者のピークは青壮年層（二〇代、三〇代）
- ② 流行の起点は主として軍隊
- ③ 医師の罹患（医療崩壊の兆し）等である。

著者は二〇一九年に亡くなったので、今回のコロナ・パンデミックには触れていない。私なりに二〇〇年前のスペイン風邪と今回のコロナを比較してみよう。

（相同点）

- ① 「空気感染」であり、唯一・最善の対策は接触を避けること
- ② 発生と終結のプロセスは不明瞭

（相違点）

- ① ウイルス学の進歩（電子顕微鏡の普及、RNAの構造分析、PCRの活用等）
- ② 今回の日本の年齢別死者は、八〇歳以上が大半で四〇歳以下は僅少
- ③ 今回の死者は世界で六九〇万人、日本で七・四万人と、大幅に減少。ただし、流行期間は二倍から三倍長い。

今回の「コロナ死者数を「超過死亡」を使い検証してみるとどうなるのだろうか。